

# 小學經濟訓

大谷權二郎著

卷上

福岡第一師範學校  
(學校圖書)

分類第	號
圖書部	門
經濟部	
正統經濟學	冊
冊	次
全	冊
分類第	號
887.1	

249110

T1A1

23

0 84

經濟者正  
經自由順



圖書 和圖書 遊



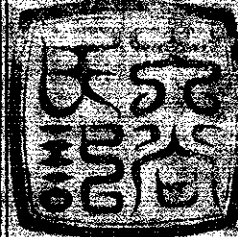
a 1380321665a  
福岡教育大学蔵書

大谷權二郎著述

小學經濟訓

全二冊

明治十五年十月開雕



利之父母  
也廉節快

樂健康之  
姊妹也

明治壬午十月

敬宇中村正直



○小學經濟訓例言

一 是書ハ小學ノ子弟ヲシテ經濟學ノ大體ニ通曉セシメンガ為ニ作りタル者ナリ

一 經濟學ノ問題固ヨリ多シ今之ヲ是書ニ悉ス能ハサルノミナラズ僅ニ掲グル所ノ目ト雖真ニ其要理梗概ヲ示スニ過ス然リト雖小學ノ子弟之ヲ反覆熟讀セハ則此學ノ大要ヲ領識スル甚タ難シトセザルナリ

一 是書ハ簡ヲ貴ビ解シ易キヲ旨トス故ニ行文字句ミナ平易ナル者ヲ擇ビ敢テ雅語綺辭ヲ

採ラズ

一書中一層大ナル文字ヲ以テ記スル者ハ此等ノ原則又ハ緊要ノ字句ニ係ル夫レ學術ノ原則ニ於ケルハ猶ホ人身ノ骨髓ニ於ケルガ如シ故ニ小學ノ兒童ヲシテ必ズ之ヲ暗記セシム可シ而テ其餘ハ唯熟讀了解以テ原則ヲ説明スルヲ得ルニ至レバ即足レリ是レ此ニ原則等ヲ書スルニ一段大ナル文字ヲ以テシ以テ讀習ニ便セントスル所以ナリ

一經濟ノ學理ヤ高尚ナリ高尚ナル學理ヲ述ル

ニ余ノ淺劣不文ヲ以テス固ヨリ以テ遺漏ナキヲ能ハズ小學ニ教師タル者は書ニ就テ是等ノ原理法則ヲ取り而テ事例ノ如キハ之ヲ自ラ求メ以テ兒童ヲ提擲セバ庶幾クハ余亦徒勞ナラズト云爾

明治十五年九月

著者 識

○小學經濟訓卷之上目次

○總論

第一章 經濟學ノ必要ナル理

第二章 經濟學ノ五大目

第三章 財ヲ生ズルト云フ義ノ解

第四章 要用ト云フ義ノ解

第五章 價值ノ解

第六章 市價ノ解

第七章 富ノ解

○生財編

- 第一章 生財ノ三元素
- 第二章 機械ノ功用
- 第三章 自然力
- 第四章 自然力ヲ利用スル事
- 第五章 勤勞ニ二種アル事
- 第六章 致富ハ財ノ多キニ由ル事
- 第七章 分業
- 第八章 分業ノ利
- 第九章 分業ノ弊害
- 第十章 分業ノ弊害ヲ醫スル事

- 第十一章 資本
- 第十二章 資本ニ二種アル事
- 第十三章 資本増セバ勞動ノ利増ス事
- 第十四章 儲蓄ノ要

○配財編

- 第一章 勞銀
- 第二章 勞銀ノ高低
- 第三章 勞銀不同ノ源由
- 第四章 機械ハ職工ノ不利タラザル事
- 第五章 利息

第六章 利息高低ノ利害

第七章 事業主ノ利

第八章 地代

第九章 開拓ハ下田ヨリ起リタル事

第十章 地ノ産力ハ限アルヤ否ノ事

以上

○小學經濟訓卷之下目次

○交易編

第一章 捌ヶ口ノ事

第二章 製産ノ利害ハ互ニ相關スル事

第三章 運輸

第四章 運輸ノ三要

第五章 物價ハ供給需要ニ隨テ高低ス

第六章 物價ハ何ニ依テ定ルカノ事

第七章 貨幣ノ用

第八章 金銀ハ貨幣ニ適當ナル事

第九章 金銀ノ増減及ビ其價値ノ高低

第十章 銅貨

第十一章 紙幣

第十二章 信約



- 第十三章 信約ノ利
- 第十四章 銀行
- 第十五章 公私立銀行ノ職掌
- 第十六章 外國交易
- 第十七章 保護交易自由交易ノ利害

○消糜編

- 第一章 有用消糜無用消糜ノ事
- 第二章 消糜ノ二注意
- 第三章 消糜ハ製産ノ方向ヲ尔ス事
- 第四章 消糜増減ノ原因

- 第五章 消糜製産互ニ相鼓舞スル事
- 第六章 法律ハ消糜者ヲ保護スル事
- 第七章 郵便電信
- 第八章 郵便電信ハ政府ノ業務タル事
- 第九章 鐵道
- 第十章 鐵道線路ノ規畫築造ノ事
- 第十一章 鐵道營業ノ事

○人口編

- 第一章 人口ノ多寡ハ國ノ富強ニ關ス
- 第二章 マルチユス氏ノ人口論

第三章 人口ヲ増殖セシム可キ事

○小學經濟訓目次終

○小學經濟訓卷之上

大谷權二郎 著

○總論

○第一章 經濟學ノ必要ナル理

吾人人類ノ此世ニ生息スル形状ヲ觀ヨ、人々皆  
ナ同一ノ事ヲ為スニ非ズ、農事ニ服スル者アリ、  
工業ヲ事トスル者アリ、商估ヲ職トスル者アリ、  
書ヲ讀ム者アリ、道ヲ講ズル者アリ、官ニ居リ政  
務ヲ理ムル者アリ、人ノ職掌ノ一樣ナラサルヤ、  
其レ此ノ如シ、然リト雖、凡ソ人々各個、其目的ト

スル所ヲ原ヌルバ、畢竟已ノ幸福安全ヲ得ント  
スルニ過ザルナリ

幸福安全、何ニ依テ得可キヤ、他ナシ、衣食住ノ諸  
ノ需要足テ、而テ、初テ之ヲ得可キナリ、然リ而テ、  
是三者ハ源泉ノ如ク、地ヨリ湧ク者ニ非ズ、又雨  
露ノ如ク、天ヨリ降ル者ニ非ズ、則額ニ汗シテ、勤  
勉労働スルノ果實ニ非ルヲ得ンヤ  
然バ則、人ノ大目的ハ、其幸福安全ヲ得ニ在リ之  
ヲ達スルハ、衣食住ノ諸ノ需要充足スルニ在リ、  
而テ、衣食住ノ諸ノ需要ハ、人ノ勤勞ニ依ラザレ

バ、生出スルヲ能ハザルナリ

今夫レ「經濟學」ハ、富ヲ作スノ學ナリ、富ヲ作ス如  
何、究竟亦衣食住ノ需要ヲ充ルノ謂ナルノミ、蓋  
シ、凡ソ天下ノ事、皆ナ其道アリ、道ハ天ナリ、天ニ  
順ヘバ成リ、天ニ背ケバ敗ル、是レ自然ノ數ナリ、  
今富ヲ作スモ亦然リ、善ク其道ヲ討尋推究シ、循  
々之ニ順テ、勤勉労働セバ、則衣食住ノ諸ノ需要  
足り、富業此ニ於テ乎、成ル、是レ經濟學ノ社會ニ  
必要ナル所以ナリ

○第二章 經濟學ノ五大目

經濟學ノ條目多カラズトセズ、然レ氏、約テ之ヲ言ハゞ、五ノ大目アリ、一ニ生財、二ニ配財、三ニ交易、四ニ消費、五ニ人口、即是ナリ、夫レ富ハ財ヲ以テ成ル、是ヲ以テ、富ヲ作サント欲セバ、先ツ財ヲ生ズルノ道ヲ講ゼサル可ラズ、因テ第一ニ生財ノ目アリ、財ヲ生出セント欲セバ、之ニ應ズルノ資本、勤勞等ヲ費サバル可ラズ、因テ第二ニ配財ノ目起ル、財已ニ生ズト雖、彼是相交易セザレバ、人々各自ノ需要ヲ達セズ、故ニ第三ニ交易ノ目ヲ設ク、財ハ偶然ニ生セズ、之ヲ生ゼントセバ、亦

必ズ多少ノ財ヲ消セザルヲ得ズ、故ニ第四ニ消費ノ目ヲ置ク、生財ハ、人口ノ多寡ニ由テ、盛衰ナキト能ハズ、是レ第五ニ、人口ヲ論ゼザル可ラザル所以ナリ

○第三章 財ヲ生ズルト云フ義ノ解

物理學ヨリ之ヲ言ハゞ、凡ソ世界ノ萬物ハ、生ズルトナク、又滅スルトナシ、而テ人ノ視テ以テ生滅スルト思ヘルハ、唯物ノ分子ノ離合聚散スルノミ、其物自ラハ、曾テ生滅スルトナキナリ、今經濟學ニ於テハ、然ラズ、財常ニ生滅シテ窮リナシ、

蓋シ財ヲ生ズルトハ、全ク無用ノ物ヲ轉ジテ、有用ノ物タラシメ、或ハ用小ナル物ヲシテ用大ナラシムルノ義ナリ、之ヲ畧言セバ、財ヲ生ズルトハ、物ニ幾分ノ價值ヲ附與スルノ謂ナリ

○第四章 要用ト云フ義ノ解

法律學、或ハ修身學ニ於テ、要用ト言ハゞ、人ノ性情生命ニ必要ナル物ノ意ナリ、例バ、煙草ノ如キハ、要用ナリトセズ、何トナレバ、是レ奢侈ニ屬シテ、生命ニ必要ナキ物ナレバナリ、然レ氏經濟上ニ於テハ、凡ソ物ノ何タルヲ論ゼズ、人ノ需要ニ

應スレバ、則之ヲ稱シテ、要用ノ物ト謂フ、而テ其

之ヲ需要スルハ、性命ノ必要ニ出ルカ、又ハ奢侈

ニ屬スルカヲ問ハザルナリ、故ニ烟草ノ若キモ、

亦要用ナル物ト稱ス可シ

物ノ要用ハ、時ト、風土ト、文明ノ度ト、ニ隨テ相同

ジキヲ得ズ、例ヘバ昔シハ、刀槍類ニ用ラレテ、

今ハ殆ント相廢レ、羅紗ノ衣ハ、寒國ニ要用ナレ

氏、熱地ニ用ナク、未開ノ民ハ、金剛石ヲ以テ頑石

ト同視スレ氏、文明ノ民ハ、之ヲ大寶トシテ鐘愛

スルガ如シ

○第五章 價值ノ解

物ノ價值トハ、其物ノ買得カヲ謂ナリ、例バ、五升ノ油ト一斛ノ米ト相交易シ、或ハ一斛ノ米ト二斛ノ麥ト相交易スルヲ得バ、則五升ノ油ハ、米一斛ノ買得カヲ具ヘ、又一斛ノ米ハ、麥三斛ノ買得カヲ有スル者ナリ、之ヲ價值ト謂フ

價值ヲ有スル物ハ、三ノ性質ヲ具ヘサル可ラズ、  
第一、其物要用ナル可シ  
第二、其物限量アル可シ  
第三、其物ヲ以テ他物ト交易スルヲ得可シ

例バ、空氣、日光ノ如キハ、限量ナク、又他物ト交易ス可ラザル者ナリ、故ニ價值ヲ有セス

價值ヲ有スル者ハ、必ズ、人生ニ要用ナル可シ、然レ氏、人生ニ要用ナル者、未ダ必シモ價值ヲ有セズ、例バ、空氣、日光、温熱ノ如キモノ、即是ナリ

○第六章 市價ノ解

市價トハ、貨幣ニ對シテ有スル物ノ價ナリ、例バ、一斛ノ米ハ金一圓ニ價スト云ハバ、即是レ市價ナリ、故ニ、俗ニ價ト云ハ、通常市價ヲ指稱スル者トス

貨幣ハ、百物ニ通ジテ交換スルヲ得可キ者ナ  
ルガ故ニ、之ヲ標準トシテ物ノ價值ヲ定ムレバ、  
市場交易ニ便ナルヲ知ル可シ

○第七章 富ノ解

富トハ、幾分ノ價值ヲ具ヘ、他物ト交易シ得可キ  
物ノ名ナリ、故ニ、土地、家屋、衣服、器具、貨幣、及ビ學  
識、伎藝、才能等、皆ト富ト稱ス可キナリ  
富ニ二種アリ、天然ノ富、人造ノ富、即是ナリ、未墾  
ノ土地、天然生ノ樹木、人ノ才能等ハ天然ノ富ニ  
シテ人工ヲ要セザル者ナリ、百貨、器具、家屋、道路

橋梁等ハ、人造ノ富ニシテ、人ノ勞動ヲ俟テ、初テ  
生ズル者ナリ

○生財編

○第一章 生財ノ三元素

財何ニ依テ生ズルヤ、或曰、生財ノ本ハ、唯「勤勞」ニ  
在ト、是未ダ允當ノ説ニ非ズ、何トナレバ、人若シ  
空漠ニ向テ勤勞ヲ施セバ、是全ク徒勞ニシテ、財  
ヲ生スルノ期ナケレバナリ、財ヲ生ゼントセバ、  
必ズヤ、定リタル材料ノ上ニ勤勞ヲ施サバ、可  
ラザルナリ、或又曰、生財ノ本ハ、唯「土地」ニ在リ、或

ハ唯資本ニ在ト、兩説亦未ダ至當ノ言タルヲ得ズ、何トナレバ、土地アリト雖、人工之ニ加ラザレバ、財ヲ生ズル能ハズ、資本アリト雖、勤勞ニ藉ラザレバ、其用ヲ為サズルヲ以ナリ。然バ則、財果シテ何ニ依テ生ズ可キヤ、曰、生財ニ三ノ元素アリ、曰、自然力、（自然力ノ尤ナル者ヲ土地トナス）曰、勤勞、曰、資本、是ナリ。是三者相須テ、初テ生財ノ功ヲ擧グ可シ、夫レ、土地モ人工力ニ依ラザレバ、則能ク物ヲ生ゼズ、人工力又資本ヲ須ザレバ、其用ヲ見ハス能ハサルナリ、要スルニ、三者合

シテ、初テ、生財ノ功全シ、若シ其一ヲ缺バ、則財生ズルヲ得ザルナリ

一人ニシテ、三元素ヲ併セ有スル者アリ、例バ、自己ノ土地ニ、自己ノ資本ヲ投ジ、又自ラ耕耘スル者ノ如シ、或ハ、二元素ヲ有スル者アリ、例バ、肥糧及ビ耕耘機具ヲ他ニ仰ギ、以テ自己ノ土地ニ、自ラ勞動スル者ノ如シ、或ハ、單ニ一元素ノ他有セザル者アリ、例バ、土地ト資本トヲ他ニ仰ギ、以テ自ラ唯勞役ヲ操ル者ノ如シ

○第二章・機械ノ功用



生財ニ大用アル者ヲ、機械ト為ス、而テ機械ノ利、大凡四アリ

第一 機械ヲ用レバ、勞少シテ、多ク物ヲ製造スルヲ得可シ、例バ、綿絲ヲ紡績スルニ、昔ハ、婦人足ヲ以テシ、甚ダ簡單、蘊造ナル機械ヲ使用セリ、今ヤ、一大紡績機械ヲ用イ、一人之ヲ使用シ、之ヲ監視セバ、則昔日婦女百人ノ勞ニ均シキ綿絲ヲ紡績スルヲ得ナリ

第二 機械ヲ用レバ、物ノ製造神速ナリ、米國ノ紐育府ナルヘラルド新聞社ノ印刷機械ハ、一時

間ニ、八面ノ新聞紙、三萬枚ヲ刷出スト云フ、是其一例ナリ

第三 機械ヲ用レバ、廉價ニ物ヲ製造スルヲ得可シ、例バ、昔時、人未ダ水車又ハ風車ノ使用ヲ知ラザルニ當テヤ、日雇以テロニ糊スル男女ヲシテ、米麥ヲ舂カシメタリ、今ヤ、水風車ヲ用ル片ハ毎日、凡ソ百五十人ノ勞動ニ當ル用ヲ為スト云フ、精米麥ノ價ヲ減ズル、固ヨリ其處ナリ

第四 機械ヲ用ル片ハ、事易ク、危險少キナリ、佛蘭西ノ統計表ヲ案ズルニ、西曆千八百六十八年

ヨリ千八百七十二年マデ、此國ニ用キタル蒸瀦  
機械ノ數ハ、凡ソ三萬二千八百個ニシテ、瀦罐ノ  
破裂セシ者、十九之ニ依テ歿シタル者、又僅ニ十  
九人、負傷者二十八人ニ過ギザリシト云フ、以テ  
機械ノ危險少キヲ證ス可シ

○第三章 自然力

草木金石咸ナ地ニ生ズ、夫レ地ハ、生財三元素ノ  
一ニシテ、又至要ナル自然力ナルハ、更ニ言ヲ俟  
ガルナリ、蓋シ、地ノ財ヲ生ズルヤ、地獨リ能ク之  
ヲ生ゼズ、他ニ之ヲ助クルノ自然力アリテ存ス

大陽雨露等即是ナリ、大陽ハ、人生ニ最モ大利大  
用アル者ニシテ、之ヨリ又ニノ自然力ヲ生ズ温  
熱、光明、即是ナリ、温熱、光明ナクンバ、則人畜モ存  
スルヲ得ズ、物産モ生ズルヲ能ハサルナリ、雨  
露ハ、善ク物ヲ養ヒ、善ク財ヲ蕃ス、以テ大陽ト併  
テ生財ニ大利アルヲ知ル可シ  
之ニ次テ、又人生ニ大利アル者ヲ海ト為ス、魚介、  
鹽、珊瑚ノ屬、此ニ蕃生ス、蓋シ、海ニ最モ貴キ者ハ、  
其能ク人物ヲ運輸スルノ利ニ若クハナシ、今夫  
レ巨額ノ物産ヲ積ミ、輒ク之ヲ縹渺數千里ノ遠

ニ致サントセバ、是豈人カノ堪ユル所ナランヤ、  
惟海ノ利ニ之レ倚ラズンバアラズ  
海能ク船舶ヲ載スト雖、船舶ヲ行ルハ、未ダ海ノ  
カノミニニシテ足レリトセズ、風又ハ、蒸瀋ノ之ヲ  
助ケル無クンバ、能ハザルナリ、海船舶ヲ載セ、風  
又ハ、蒸瀋ノ力、之ヲ行ルト雖、之ヲ欲スル處ニ道  
キ、方向ヲ誤ルトナカラシムル者ハ、磁石ノ功ナ  
リ、磁石モ亦必要缺グ可ラザルノ自然カト謂可  
シ  
此他、空氣、重力、引力、彈力、等ノ自然カ、一テシテ足

ラズ、而テ多少咸ナ、生財ニ要用ナラズンバアラ  
ズ

○第四章 自然カヲ利用スル事

夫レ、世運ノ開否ハ、自然カヲ利用スルト、否ニ、關  
スルト大ナリ、蓋シ、自然カノ利ハ、人カヲ省キ、時  
間ヲ節約スルニ在リ、大古草昧ノ世ニ當テヤ、人  
ノ勞動ハ、專ラ腕力ニ倚リ、物ノ運搬ハ、僅ニ肩ト  
手トヲ以セリ、是ヲ以テ、勞カヲ費スト大ニ、時日  
ヲ消スルト多ク、而テ為ス所甚太ク、僅少ナリシ  
ナリ、世運少ク開ケルニ及テ、人漸ク牛馬等ヲ使

役スルノ利ヲ覺レリ、牛馬モ亦自然力ニ屬ス、之ヲ使役スルニ至テ、人カヲ省キ、時日ヲ節約セシム、業已ニ、幾何ゾヤ、然リト雖、此時代ニ於テハ、自然力ノ利未ク世ニ明カナラズ、其明カナルニ至リシハ、迥ニ後世ノ事ニシテ學藝ノ進歩、機械ノ發明ヨリ昉マレリ

試ニ思ヘ、昔ハ、遠隔ノ地ニ急要アレバ、則多クノ金ト時トヲ消シ、晝夜兼行ノ飛脚ニ藉テ、纔ニ之ヲ辨ゼリ、然ルニ電信ノ發明アリテヨリ爾來、些少ノ費ト時トヲ以テ、雲水萬里ノ地ト雖、咄嗟事

ヲ達ス可シ、又例バ、書籍ヲ印行スルニ、昔ハ、則文字ヲ木版ニ雕刻シ、多々勞カヲ費シテ後ニ非レバ、之ヲ調製スル能ハザリシナリ、今ヤ、活版ノ發明ニ依テ、幾萬字ノ多キモ、忽チニ植字シテ、忽ニ刷出スルトヲ得可キナリ

此ニ由テ、之ヲ觀ヨ、自然力ノ人カト時間トヲ省キ、人ノ用ヲ利スル至大ナルトヲ、是ヲ以テ、自然力文運ヲ促シ、文運自然カヲ開ク、今夫レ、開明ノ國ニ於テ、孳々工夫ヲ凝ラシ、種々試練ヲ積ミ、以テ益々要具機械ヲ發明セント欲スル者、豈他ア

ランヤ、亦惟自然カヲ利用セントスルノミ  
夫レ、自然カノ利ハ、人カト時間トヲ省クニ在リ  
故ニ、之ニ頼テ物ヲ製造セバ、物ノ價ノ廉ナルヲ  
期ス可シ、蓋シ、人カト、時間ハ、資本ノ一部タリ、今  
物ヲ製造スルニ當リ、之ニ要スル人カト、時間ト、  
ノ幾分ヲ省クヲ得バ、則其資本ノ一部ヲ省クノ  
理ナリ、已ニ、資本ノ一部ヲ省ク、則物ノ價ノ廉ナ  
ルヲ致スハ、固ヨリ理ノ當然ノミ、以テ自然カノ  
生財ニ大關係アルヲ觀ル可シ

○第五章 勤勞ニ二種アル事

勤勞ハ、之ヲ大別シテ、二種トナス、所謂、役心、役形、  
即是ナリ、言ヲ易テ之ヲ云ハバ、**勤勞ニ、精神ノ勤**  
**勞ト、形體ノ勤勞ト、ノ別アリ**、學士、醫者、裁判官等  
ノ若キハ精神ノ勤勞ニ服スル者ナリ、農夫、職工、  
等ノ如キハ、形體ノ勤勞ニ従フ者ナリ、之ヲ要ス  
ルニ、此二種ノ勤勞ハ、俱ニ人生ニ必要缺ク可ラ  
ザル者ナリ  
然ルニ、或曰、精神ノ勤勞ハ、不生財勤勞ナリト、此  
說ニ従ヘバ、精神ノ勤勞ハ、財ヲ生ゼザルガ故ニ、  
經濟上ニ於テ無益有害ノ勤勞ナリ、宜ク之ヲ衰

滅セシム可シ、一國ノ人民、ミナ形體ノ勤勞ニ服シテ、初テ、財充テ、富至ル、ト言ハザル可ラズ、是寧口誤謬ノ甚シキ者ニ非ズヤ、夫レ、醫者有テ初テ人ノ健康ヲ保テ、裁判官有テ初テ社會ノ紛議止ミ、學士有テ初テ道理明カナリ、要スルニ、皆ナ是レ、財源富本ヲ養フ者ナリ、且夫レ、凡ソ機械等ノ發明ハ、皆學士ノ研究切磋ニ依テ昉リ、以テ生財ノ途ニ浩益大利ヲ與フ、此一事ヲ以スルモ、精神ノ勤勞亦生財勤勞タルヲ明シ、而テ之ヲ作興旺盛ナラシメザル可ラザルハ、更ニ言ヲ俟ズ

○第六章 致富ハ財ノ多キニ由ル事

財ハ、固ヨリ人ノ勤勞ニ依テ生ズ、然レ、富ヲ致スハ、勤勞ノ多キニ由ルト思フ可ラズ、蓋シ富ハ財ヨリ成ル、故ニ、此ニ國アリ、其人民ノ勤勞ノ量ハ、僅少ナリト雖、財ヲ得ルヲ多ケレバ、之ヲ富國ト稱ス可シ、然バ則、富ハ、勤勞ノ多量ニ依ラズ、財ノ多額ニ在リ、例バ茲ニ一町歩ノ田地アリ、甲ハ、腕カニ頼リ、鋤鋤ヲ以テ、之ヲ耕耨シ、劇勞以テ米十石ヲ得タリ、乙ハ牛ヲ以テ腕カニ代ヘ、僅々ノ勞動ヲ以テ、米二十石ヲ得タリトセバ、甲ノ富ハ、

乙ノ富ニ若ガサルヲ分明ナリ、以テ富ハ、勤勞ノ多ニ依ラザルヲ證ス可シ、文明國ノ民ハ、少ク勞シテ、多ク得ンヲ工夫ス、是亦深ク察ス可キナリ

○第七章 分業

文明國ニ於テハ、分業ヲ為スヲ甚太シ、蓋シ、分業ハ、社會自然ノ勢ナリ、以何トナレバ、若シ人々ミナ其家ヲ作り、其衣ヲ製シ、其食ヲ調へ、其他萬般ノ需要器具ヲ擧テ、皆自ラ製造セザル可ラズトセバ、決シテ己ノ幸福安全ヲ得ルノ期ナキノミナ

ラズ、性命猶且ツ保ツヲ能ハザルニ至ル可レバナリ、若シ夫レ、人々業ヲ分テ、一ヲ專ニセバ、則家ヲ作ルニハ、大エアリ、衣食ヲ供スルニハ、農工アリ、之ヲ聚散配布スルニハ、商估アリ、我ハ、我が業トスル處ヲ以テ人ノ用ニ供シ、人又其職トスル處ヲ以テ我ニ便ス、彼我相倚賴シテ、萬般ノ需要ヲ濟ス、其便利ヤ、大ナリ、其幸福ヤ厚シト謂可シ、是レ分業ノ由テ起ル所以ナリ

今、一段細ニ分業ヲ説ク、夫レ、人ノ業ハ、相分テ、農タリ、エタリ、商タリ、ト雖、各業中、猶ホ思量ス可ラ

ザルノ細分アリ、試ニ針ノ製造ヲ將テ之テ例セ  
ンニ、針線ヲ作ル者、針線ヲ直クスル者、適度ニ之  
ヲ切斷スル者、針頭ノ穴ヲ穿ツ者、針尖ヲ為ス者、  
針体ヲ磨ク者、等、凡ソ針ノ消糜者ノ手ニ達スル  
前、少クトモ、十八業ヲ經ル者ナリト云フ、萬般大  
小ノ事、大概皆然ラザルハナシ、業ノ令ル、ヤ、甚  
シト謂可キナリ

○第八章 分業ノ利

分業ノ利、大約四アリ、一ハ精巧、二ハ快敏、三ハ事  
物ノ發明、四ハ人ノ能力ニ應ジテ、業ヲ課ス

得、即是ナリ

第一 凡ソ、一業ニ專ナル者ハ、常ニ、單一ノ事ニ  
從テ、他ニ移ラズ、心身手足善ク之ニ慣ル、ガ故  
ニ、作業自ラ精巧ニ至ル者トス  
第二 一業ニ專ナル者ハ、位地ヲ替へ、所作ヲ變  
ジ、其間ニ時ヲ失フヲナシ、故ニ、事業快敏ナリ、業  
ヲ移轉セバ、時ヲ失フヲ少キニ似テ多シトス  
第三 一業ニ專ナル者ハ、心目ヲ注スル、常ニ一  
事一所ニ在ルカ故ニ、物ノ便利ヲ得ンガ為ニ、自  
ラ工夫發明ヲ為ス者ナリ



第四 業ヲ分ツ片ハ、大、小、難、易、種々ノ事ニ分ル、ガ故ニ、慥弱ノ者、強壯ノ者、各其能トカトニ應ジテ、事ヲ課シ、無職ノ者ヲ生ズルノ不利ナシ

○第九章 分業ノ弊害

分業ノ利ノ大ナルヤ、大率、上章ニ述タルガ如シ、然リト雖、亦其弊害ナキト能ハス、今、其尤ナル者ヲ列舉セバ、凡ソ三アリ

第一 「分業ハ、大ニ人ノ身體ヲ疲勞衰弱セシム夫レ、分業甚シケレバ、人々一業ヲ專ラニシテ他事ニ移ラズ、而テ常ニ身體ノ一部ヲ勞シテ、他ヲ

用非ザルナリ、故ニ、四肢身體運動ノ權衡ヲ失ヒ、遂ニ憊ム可キ疲勞衰弱ニ陥リテ、或スルニ至ル、譬ヘハ、猶ホ衣服ノ一所、常ニ物ニ觸ルレハ、忽チ破レテ、衣服ノ用ヲ失フガ如シ、歐洲各邦ノ物貨製造所ニ於テハ、職工ノ此患ニ罹リテ死シ、或ハ、假令ヒ、幸ニ死ニ至ラザルモ、四肢適度ノ發達ヲ失フテ、不具ノ身トナル者、甚ダ多シト云フ、此害ヤ、唯形體ヲ勞スル職工等ノミニ止ラズ、精神ヲ勞スル學者、書生、等ニ於テモ亦然リトス

第二 一業ニ專ナル片ハ、他事ヲ辨識セズ、歐洲

各國ニ於テ、物産製造所ノ職工ハ、大凡、無智文盲ニシテ、知識ノ一點ニ於テハ、頑然トシテ、木石ノ如キ者アリ、又、星學ニ從事スル者、地理學ヲ專修スル者ハ、天文ト地理ノ外、世事ヲ解セズ、或ハ、訟師ノ法庭ニ出テ、事理ヲ辯論スルヤ、神ノ如シト雖之ヲ法庭ヨリ出サシメハ、百事漠然トシテ、痴漢ノ如キ者、間々之レ有リト云フ

第三、分業ハ、人ヲシテ不快ナル事業ニ從事セシムル、凡ソ、人ハ、常ノ職ナカル可ラズト雖、其職内ニ於テ、幾分カ、轉ズル所アルヲ要ス、譬ヘバ、山ヲ

觀レバ、更ニ水ヲ觀、又轉ジテ、原野ヲ觀レバ、眼境常ニ新ニシテ、心氣快活ナルガ如シ、業務モ亦少シク轉ジテ、新ナル處アレバ、則勤勞ノ快樂ヲ失フナカル可シ、然ルニ、業ヲ細分スル片ハ、常ニ、全ク同一事ニ服セザル可ラズ、是ヲ以テ、遂ニ、事ニ倦厭シテ、勤勞ノ快樂ヲ失フ者ナリ

○第十章 分業ノ弊害ヲ醫スル事

上章ニ記述シタルガ如ク、分業ノ弊害ノ甚シキ者、凡ソ三アリ、蓋シ、第一ノ弊害ヲ醫スルノ道ハ、他ナシ、職工ハ、少シク、就職時間ヲ減ジテ、身體ヲ

養ハシムルニ在リ、業務繁劇ナル製造所等ニ於  
テハ、雇工ヲ役スル、朝六七時ヨリ、以テ夜ノ八九  
時乃至十時後ニ至ル者アリ、之ヲ如何ンゾ、過劇  
ノ勞動ト謂ハザル可ンヤ、又、學者書生ハ、日々体  
操ノ時間ヲ定メ、以テ必ず知識ノ伸張ト同時ニ、  
形體ヲ養ハザル可ラズ、第二ノ弊害ヲ去ルノ法  
又他ナシ、教育ヲ普及スルニ在リ、職工ノ如キモ、  
必ス普通ノ教養ヲ受ケシメ、或ハ宜ク夜學校ヲ  
設ケテ、之ニ入ラシム可シ、而テ一ノ専門科ヲ修  
學セント欲スル書生ト雖、亦至當ノ學制ヲ設ケ

テ、諸學科ノ楷榘ヲ授クルヲ要ス  
第三、分業ノ弊害ハ、如何シテ、之ヲ除ク可キヤ、今  
姑ク之ヲ讀者ノ考索ニ任ズ、

○第十一章 資本

世間普通ノ意義ニテ、資本ト云ハ、單ニ貨幣ヲ  
指稱セリ、今、經濟學理上ニテハ、其意義甚ク廣シ、  
啻ニ貨幣ノミニ非ルナリ、例バ、土地ヲ開拓シテ、  
阡陌ヲ通ジ、溝渠ヲ穿バ、阡陌溝渠ハ、則資本タリ  
物産製造ノ元糧、及機械、家屋等モ、亦資本タリ  
蓋シ、凡ソ、物々何タルヲ問ハズ、設令ヒ、金錢寶貨

ト雖取テ以テ直ニ資本ナリト斷言スルヲ得  
ズ、物ノ資本タルト否トハ、之ヲ生財ノ途ニ向ル  
ト否ト、ニ依テ分ル、者ナリ、金錢寶貨ト雖、之ヲ  
浪費セバ、資本ト言フヲ得ズ、若シ夫レ、生財ノ途  
ニ向ル者ハ、財ヲ生ズルノ直接ナルト、間接ナル  
トヲ論セズ、皆之ヲ資本ト稱スルヲ得ナリ

○第十二章 資本ニ二種アル事

資本ニ二種アリ、固着資本、流通資本、即是ナリ、今  
夫レ、綿布ヲ製造セント欲セバ、其製造ノ時ニ當  
テ、消費スル資本アリ、綿絲ノ如キ、是ナリ、又、消費

セザル資本アリ、製造機械、製造家屋、等ノ如キ、是  
ナリ、前者ヲ流通資本ト云フ即製造物ノ元糧等  
ニシテ、物ノ製造ト同時ニ、他物ニ變形スル者ナ  
リ、綿絲ノ綿布ト變ズルガ如シ、後者ヲ固着資本  
ト云フ、是レ、漸々考朽スト雖、決シテ一時ニ消失  
スル者ニ非ズ、之ヲ再言セバ、物産製造ノ元糧、器  
械等ヲ購フノ貨幣、其元糧、職工ノ給銀、食糧乃至、  
製造ニ費ス石炭等ハ、流通資本ニ屬ス、製造機械、  
製造家屋、又ハ其修繕等ハ、固着資本ナリ、事業  
ノ大小ハ、資本ノ大小ニ應ズ、一國資本多ケレバ、

事業ヲ大ニス可シ、資本少ケレバ、事業張ルヲ得ズ、資本ノ少キヲ察セズシテ、事業ノ振興セザルヲ訴ルハ、源ノ濁レルヲ知ラズシテ、流ノ清ヲ望ニ異ナラズ

○第十三章 資本増セバ労働ノ利増ス事  
資本愈々増セバ、勤勞ヲ操ル者益々其利ヲ占ム。蓋シ、資本ハ、勤勞ヲ俟ザレバ則用ヲ為サズ、故ニ資本増セバ、勤勞ノ需要從テ増シ、勤勞ノ需要増セバ、其利從テ加ハル。明シ、茲ニ一村アリ、五百ノ村民各其業ニ從事シ、毎日五十錢ノ勞銀ヲ得

然ルニ、今鑛山ヲ發見シ、之ヲ採掘セン為メ、新ニ百人ノ雇工ヲ求ムトセバ、一日五十錢ノ勞銀ニテハ、之ニ應ズル者ナカル可シ、譬ヘバ十五人腕車ヲ要スル時ノ車賃ハ、十人之ヲ要スル時ノ車賃ヨリモ、高カラザルヲ得ザルト、同一般ナリ

○第十四章 儲蓄ノ要

凡ソ、人ハ、疾病其他非常不虞ノ災故ナキヲ能ハズ、仮令ヒ之レ無シト雖、他日身ヲ立テ、業ヲ擴ルノ志ナクシテ可ナラン。然バ則、人タル者、各自ノ地位ニ應ジテ、平素幾分ノ財金ヲ儲積シ、以テ

二者ノ用ニ供備セザル可ラズ、若シ、夫レ、之ヲ得テ、之ヲ盡セバ、則何ヲ以テ身ヲ立テ、業ヲ擴メ、又何ヲ以テ、非常ノ災故ヲ救ハンヤ、將ニ困頓窮迫ノ中ニ呻吟スルノ外ナカラントス。儲蓄固ヨリ欽グ可ラズ、然リト雖、昔時、未開ノ世ニ於テ、蓄積シタル財金ヲ土中ニ埋藏シ、或ハ、庫底ニ秘匿シタル習俗ノ如キハ、啻ニ一人ノ不利タルノミナラズ、亦一國ノ損失タルヲ免レズ、宜ク之ヲ活潑有益ノ所ニ置ザル可ラズ、是レ、文明ノ國ニ儲金預リ所ノ設ケアル所以ナリ、瑣々ノ

額ト雖、隨テ儉貯セバ、隨テ之ヲ此ニ預ケテ懈ラザレバ、則日ニ月ニ其利ヲ生ジ、利又利ヲ加ヘ、數年ノ後ニ至テハ、未ダ曾テ期セザル巨額ニ達スルコトアリ、果シテ然レバ、非常ノ災故救フ可シ、身ヲ立テ、業ヲ擴ル、亦望ム可シ、豈美ナラズヤ

○配財編

○第一章 勞銀

天下何ノ業ヲ論ゼズ、凡ソ事ヲ為シ、物ヲ作サント欲セバ、則多少人ノ勤勞ヲ要セザル者ナシ故

ニ事物業ヲ卒レバ、其成績ノ幾分ヲ以テ、勤勞ニ報セザル可ラザルナリ  
然リト雖、物ノ業、多クハ、一朝一夕ニシテ成ル能ハズ、或ハ數年、乃至數十年ヲ要スル者アリ、而テ勤勞ヲ操ル者、大概富裕ナラス、職工ノ若キハ、毎日、又ハ每週、毎月、報勞ヲ受ケザレバ、生活ノ計ナク、固ヨリ物ノ成功ヲ待テ能ハザルナリ、此ニ於テ、事業主タル者、物ノ成功如何ニ拘ラズ、豫ノ勤勞者ト約シ、若干ノ報勞金ヲ、毎日、又ハ、每週、毎月、之ニ與フ、之ヲ勞銀ト称ス

○第二章 勞銀ノ高低

勞銀モ亦高低スル乎、曰固ヨリ然リ、勤勞ノ供給需要ノ如何ニ依テ、勞銀ノ高低ナキト能ハズ、勤勞ヲ要スル者多ク、而テ勤勞ヲ操ル者、少ケレバ、勞銀騰貴シ、若シ之ニ及セバ、勞銀低下スルト、必然ノ勢ナリ、英國ノ經濟學者コブデン氏曰、二人ノ職工、一事業主ヲ追逐セハ、勞銀下リ、二人ノ事業主、一職工ヲ追逐セハ、勞銀上ルト、此語蓋シ、事實ヲ得タリト謂可シ  
世人或ハ曰、勞銀ノ高低ハ、衣食諸物價ノ貴賤ニ

由ルト、是レ未ダ精覈ノ説ニ非ズ、何トナレバ、設  
令ヒ、衣食諸品ノ價ハ騰貴スト雖、勤勞者多クシ  
テ、之ヲ要スル者、少ケレバ、則勞銀昂ルヲ得ズ、  
若シ之ニ反シ、勤勞者、少ク、而テ之ヲ要スル者多  
ケレバ、則衣食諸品ノ價ハ、設令ヒ低廉ナリト雖、  
勞銀昂ラザルヲ得ズ、之ヲ約言セバ、勞銀ノ高  
低ハ、大概常ニ、勤勞ノ供給需要ノ法則ニ從フ者  
ナリ

○第三章 勞銀不同ノ源由

凡ソ、勞銀ハ、勤勞ノ種類ニ依テ、同一ナラズ、其故

何ゾヤ、曰アダムスミツ氏之ヲ説ク、詳ナリ、請  
フ、同氏ノ説ヲ舉示シテ、以テ之ヲ明ニセン、蓋シ、  
同氏ノ説ニ據ルニ、此ニ、五ノ源由アリ

第一 勞銀ノ均シカラザルハ、勤勞ニ、難、易、清潔、  
不清潔、貴ブ可キ事、賤シム可キ事ノ別アルニ由  
レリ

第二 勞銀ノ均シカラザルハ、習業ノ難易ト、習  
業費ノ多寡ト、ニ由レリ、例バ、土石等ヲ運搬スル  
職、又ハ、土石ヲ掘ル業ノ如キハ、特ニ、之ヲ習練ス  
ルヲ要セザル可シ、故ニ其勞銀卑シ、之ニ反シテ



時計職、雕刻師、畫工、又ハ醫者、訟師、學者ノ業ノ如キハ、數年乃至十數年ノ習熟切磋ヲ要シ、金錢ヲ費ス、亦小少ナリトセズ、故ニ、勞銀貴カラザルヲ得ザルナリ

第三 勞銀ノ均シカラザルハ、間斷ナク操ルヲ得ル職業ト、否ト、ノ別アルニ由レ、以例バ、氷ヲ販賣スル者ハ、炎天盛暑ノ候ニ非レバ、營業スルヲ能ハズ、故ニ、其勞銀自ラ高シ

第四 勞銀ノ均シカラザルハ、人ノ信任ヲ要スル職ト、否ト、ノ別アルニ由レ、以例バ、田野ノ耕耨

ハ、人ヲ擇バズ、力此ニ堪ル者ナレバ、則可ナリ、然レ、銀行ノ會計出納ニ任ズル者ノ若キハ、未ダ筆算ノ技能ノミニシテ足レリトセズ、必ズヤ、亦實直、清廉、以テ人ノ信任厚キ者ニ非レバ、不可ナリ、故ニ、其勞銀卑シカラズ

第五 勞銀ノ均シカラザルハ、成業ノ危険少キト、多キト、ノ別アルニ由レ、以、今一少年ヲシテ靴職ヲ習ハシメント欲セバ、其成業、殆ンド疑ナケン、然レ、若シ、之ヲ學校ニ入ラシメ、十數年ノ久ヲ期シテ、或ハ、醫學、或ハ、畫學、或ハ、其他ノ專門學

ヲ得業セシメント欲セバ、其成販甚ダ測リ難キ者アリ、故ニ業成レバ、其勞銀高カラザルヲ得ズ

○第四章 機械ハ職工ノ不利タラザル事

機械ノ用ハ、人ノ勞動ニ代ルニ在リ、而テ、機械新

ニ出レバ、則職工一時其業ヲ失ヒ、或ハ、其勞銀ノ

低落ヲ致ス者ナリ、是ヲ以テ、職工ハ、機械ヲ視テ

以テ大敵大寇トセリ

然リト雖、機械ノ利ハ、畢竟亦職工ノ利ナリ、一例

ヲ舉テ之ヲ明ニセシ、茲ニ製絨所アリ、勞銀ヲ職

工ニ拂フ、一年ノ通計、十萬圓ナリトス、今新ニ

製絨機械ノ發明アリ、則之ヲ使用シテ、大ニ職工ノ數ヲ減ジ、之ニ拂フ勞銀ノ高モ從テ減ジ、一年四萬圓ヲ出ズト假定セヨ、即事業主ハ、職工ノ勞銀ヨリ六萬圓ヲ省ク、得タルナリ

今事業主タル者、六萬圓ノ金額ヲ如何ニ處理セシカ、製絨ノ業ヲ擴張スルニ非レバ、必ズ以テ他ノ事業ノ資本トナス可ク、而テ、孰レモ、更ニ、職工ノ需要ヲ増サバルヲ得ザルナリ、且夫レ、機械ヲ以テ物ヲ製造セハ、物ノ價大ニ低下シ、而テ、其影響ニ依テ、又他物ノ價ヲ減ズルモノアラン、則職

工ノ世人ト俱ニ其利ヲ受クルヤ、言ヲ俟ズシテ明ナリ  
之ニ加ルニ、新ニ、機械ヲ發明セバ、之ガ製造ニ職  
工ヲ要スルハ勿論、其製造ニ要用ナル器具ノ製  
調等ヲ詳ニ考查セバ、又間接ニ、夥多職工ノ需要  
ヲ増シタルノ理ナリ  
然バ則、機械新ニ出レバ、一時業ヲ失フノ職工アリト雖、到底、機械ハ、職工ノ寇敵ニ非ズシテ、良友  
タリ、其利廣クシテ、久シキニ傳フ、歐洲諸製造所  
ノ職工ノ生活ノ有様ハ、之ヲ三四十年前ニ比ス

レバ、概シテ、大ニ、改良ニ趣キタリト云フ、以テ益々本章ノ虚ナラザルヲ證ス可シ

### ○第五章 利息

事業ノ資本主タル者、資本ノ多寡ニ應ジテ、其利ヲ受ルハ、固ヨリ、當然ナリ、何トナレバ、事業若シ資本ヲ缺バ、則起ル能ハス、且夫レ、事業中途ニシテ敗ル、トアレバ、資本主ハ、元金ヲモ失フノ危険ニ居ル者ナルヲ以ナリ、資本主ノ利ハ、之ヲ利息ト稱ス

利息ノ高低、何ニ依テ來ル乎、曰、亦唯供給需要ノ

原則ニ依テ來ルノミ、即チ資本多クシテ、之ヲ借  
ラントスル者、少ケレバ、利息下リ、資本少クシテ  
之ヲ借ランスル者、多ケレバ、利息昂ル

○第六章 利息高低ノ利害

世人動モスレバ輒チ謂ク、利息ノ高キハ、惡表ナ  
リ、利息ノ低キハ、善兆ナリト是レ未ダ必ズシモ  
然ラズ、利息高低ノ原因ヲ知ラザレバ、未ダ以テ  
其善惡ヲ評スル能ハザルナリ、今夫レ、一國商工  
業振起シ、資本ノ需要、為ニ急ナルヲ以テ、利息ノ  
高ヲ致サバ、則是レ善兆ナリ、若シ事變騷擾起リ、

資本ヲ貸ス者、少キニ依テ、利息昂レバ、則之テ惡  
兆ト謂ガルヲ得ズ、今又資本ノ需要ハ、前日ヨリ  
減ジタルニ非ズト雖、其供給増シタルニ依テ、利  
息下レバ、則是亦善兆ト謂可シ、然レモ、利息ノ下  
リタル原因、此ニ非ズ、國內ノ商工業、萎靡振ハズ、  
資本ノ需要減ジタルニ依テ、之ヲ致セバ、則是レ、  
惡兆ト為サルヲ得ズ、此ニ由テ之ヲ觀レバ、利  
息ノ昂低スルヤ、善ク其原因ヲ詳ニスルニ非レ  
バ、未ダ以テ、其善惡ヲ言フ能ハズ

○第七章 事業主ノ利

一事業中事務最モ繁ク、苦慮最モ甚シキ者ヲ事業主ト爲ス、其理三アリ

第一 事業主タル者業ヲ起サント欲セバ、則先ヅ之ニ要スル資本ハ幾何、如何シテ之ヲ處辨セシ、又傭工幾人ヲ要スル、善ク諸務ニ堪ユル者ヲ那處ヨリ傭得可キカ、等其他萬般ノ事ヲ計圖熟慮セザル可ラズ、之レガ爲ニ、東奔西走、眠食且ツ安ゼザルトアラシ

第二 此ノ如クニシテ、已ニ事業ニ着手セバ、復又資本不足ナキカ、傭工其人ヲ得タルカ、ヲ考查シ、或ハ事最初ノ目的ニ達シ得可キカ、意外ノ難事ニ遭遇スルトナキカ、損益相償ハサルトナキカ、等ノ苦心、固ヨリ一二ニシテ止ラザル可シ

第三 幸ニ、事業其端緒ニ就クモ、勞銀ヲ諸雇人ニ拂ヒ、資本ノ元利ヲ計算返濟シ、而テ後ニ非レバ、自己事業主タルノ利ヲ収ムル能ハズ、若シ夫レ、不幸ニシテ事失敗セバ、啻ニ多年ノ計畫苦心、泡沫ニ屬スルノミナラズ、將ニ亦名状ス可ラザルノ損害困厄ヲ蒙ラントス

夫レ、以上ノ三理由アリ、故ニ業成レバ、則事業主

タル者ノ利ヲ收ムル、固ヨリ宜ク資本主ノ利、又ハ勤勞者ノ勞銀ヨリモ大ナル可シ、若シ然ラズニバ、誰カ敢テ心カヲ盡シ、危険ヲ顧ミズ、甘ジテ事業ヲ起ス者アラシヤ、然ルニ、製造所ノ職工等、動モスレバ事業主ノ收益ノ過當ナルヲ歎々シ甚シキニ至テハ、黨ヲ結デ、暴動ヲ起スアリ、事理ヲ解セザル者ト謂可シ

○第八章 地代

地代トハ何ゾヤ、曰「土地所有ノ利ヲ謂ナリ、蓋シ、凡ソ、大古草昧ノ世ノ如ク、土地ノ分量限リナク、

人々隨意ニ、土地ヲ所有スルヲ得レバ、地代ノ起ル理ナシ、何トナレバ、已ニ人々隨意ニ土地ヲ所有スルヲ得バ、特ニ、之ヲ他ニ借リテ、其利ヲ拂フノ要ナキヲ以ナリ、世運漸ク進ミ、人口既ニ蕃殖セバ、荒蕪隨テ開ケ、土地大概人ノ占領スル所トナル可シ、已ニ此ニ至レバ、人隨意ニ土地ヲ所有スルヲ能ハズ、故ニ、耕地ヲ求ントスル者ハ、之ヲ他ニ仰ガザル可ラズ、已ニ之ヲ他ニ仰ガハ、則幾分ノ地代ヲ出シ以テ地主ニ致サバル可ラザルナリ

地質ニ肥瘠ノ同ジカラザルアリ、水利ノ善不善アリ、地ノ位置亦遠近便不<sub>レ</sub>便ナキト能ハズ、此ノ如キハ、皆以テ地代ヲ高低スルニ足ル

○第九章 開拓ハ下田ヨリ起リタル事

地ノ開ケルヤ、原來上田ヨリ昉リ、以テ下田ニ達シタル乎、或ハ下田ヨリ起リ、以テ上田ニ及ビタル乎、土地開闢ノ序、果シテ如何之、曰、之ニ兩説アリ、然リト雖、之ヲ道理ト、事實トニ徴スルニ、耕作ハ瘠土ヨリ昉リ、以テ漸ク沃壤ニ及ビタルト明カナリ、抑肥沃ノ地ハ、日光隆ニ射レ、土膏脈發、從

テ草木怒生シ、中ニ猛獸毒蛇ノ繁生横行スル所タリ、是レ世道進ミ、機械稍々備ルニ至テ、漸ク開ク可シ、豈機械備ラズ、生靈寡キ、草昧ノ代ノ能ク耕耘スル處ナランヤ

且夫レ上古ノ民ハ、木實ヲ採リ、魚肉ヲ食フモ、尚ホ生存スルニ餘リアリ、而テ人口少ク蕃殖スルニ至テモ、天然ノ平坦入り易キ地ニ於テ、耕耨播種スレバ、則又餘リアリ、焉ゾ入り難キ深林沮洳ヲ開キ、非常ノ勞動ヲ甘ジ、好テ難事ニ當ルノ理アランヤ

○第十章 地ノ産力ハ限アルヤ否ヤノ事  
地ノ産力ハ、本來限りアル者トス、夫レ、勤勞ト、資本ト、ヲ倍增スルニ隨テ、地ノ産力、亦倍增シテ窮極ナクンバ、則憂懼ス可キナシ、然レ、地ノ産力、業已ニ、限りアレバ、人口増殖スルニ隨テ、農産ノ價格騰揚セシ、果シテ然レバ、後世實ニ懼ル可キナリ、ト謂フ者アリ、是レ或ハ一理アリ、然リト雖、詳ニ社會ノ實勢ヲ察セバ、是亦大ニ憂ルニ足ラザル者アルガ如シ、何ゾヤ、人事世道ノ駸々トシテ進ミ、百事萬業ノ漸ク精妙ニ赴ク者、即是ナ

リ  
例バ、近代化學ノ進歩ニ依テ、諸種ノ肥糞ヲ利用シ、工業ノ開ケルニ依テ、百般農具ノ至便ナル者ヲ創造シ、農學ノ煥發ニ依テ、種藝ノ法ヲ精クシ、地味ノ適否ヲ檢スル等、凡ソ世運進ムニ隨テ、人工人カヲ盡シ、殖産ノ道、殆ンド將ニ窮リナカラントスルノ勢アリ、故ニ、將來尚ホ學術農事ノ進歩スルニ從テ、地ノ産力未ダ決シテ今日ニ止ラザルヲ疑フ容レサルナリ

○小學經濟訓卷之上 終